



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	イーゴリ遠征譚（訳及び注）(VI)
Author(s)	木村, 彰一; Kimura, Shoichi
Citation	スラヴ研究, 23, 87-94
Issue Date	1979
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5080
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113045.pdf



イゴリ遠征譚

(承 前)

木村 彰 一 訳

149. ヤロスラーフよ、フセスラーフのなべての子たちよ。いまははや、おみたちは旗を伏せ、こぼれたつるぎを鞘におさめるほかはない。

150. おみたちはもはや父祖のほまれを離れたのだ。

149. 「ヤロスラーフよ、フセスラーフのなべての子たちよ」——J Ярослав (PA) и вси внуце Всеслави! (P!なし) Szeftel (La Geste, 137) は P. Vjazemskij の説を踏襲し、このヤロスラーフは, Černigov の Jaroslav Vsevolodovič (115の注参照) を指すものと考え、149-151は、1180年、Ol'goviči 系の公たちである上記 Jaroslav と Igor' (Slovo の主人公) とが Druck の Vseslaviči 系の公たちを攻めて Polock の地を侵した事件を暗示するものと説いています。なおこのとき Vasil'ko の二人の息子、Polock の Vseslav と Vitebsk の Brjačislav をふくむ Vselaviči 系の公たちは、Jaroslav や Igor' に味方して、同族の公たちと戦いました。すなわちこの戦いもまた、作者が批難してやまない《котора》のひとつであったわけです。Ipatij 年代記 1180年の項参照。

このような解釈に対して、Lixačev (*op. cit.*, 450-452) は、PA の Ярославе を Ярославли (すなわち彼によれば Jaroslav Mudryj の子孫たち) と訂正しています。その理由は、この箇所コンテクストから言って、「作者が念頭においているのは、何か大きな歴史的現象」であることは間違いなく、したがって、長年にわたる《которы》をやめよという作者のアピールは Jaroslav Mudryj の子孫と Polck の Vseslav の子孫との全部【すなわち当時のロシアの公のほとんど全部——S. K.】に対するものと見てはじめて納得がゆく、というにあります。一見魅力的な説ではありますが、Stelleckij (*op. cit.*, 185-186) が L. Dmitriev の説を引いて言っているように、12世紀末においては Jaroslav の子孫は jaroslavli (ないし jaroslaviči) ではなく、ol'goviči, ないし monomaxoviči とよばれていたはずであり、また、151の「異教の勢を…フセスラーフの国へと引き入れた」の「フセスラーフの国へ」(на жизнь Всеславию) はロシアの国全部を指すとは考えられず、さらにまた、私見によれば、149の внуце Всеслави も、151の на жизнь Всеславию も、あきらかに153以下の Vseslav についての記事への橋渡しの役割りをになっていますから、Lixačev のこの提案は結局受け入れがたいものと思われます。

「いまははや、おみたちは旗を伏せ…」——уже понизить стязи свои, вонзить свои мечи верезени 「旗を伏せ」「つるぎを鞘におさめる」ことは、Lixačev (*op. cit.*, 452) の言うとおり、「敗北の自認」を意味するものでしょう。つまり作者は、Jaroslav にせよ、Vseslaviči にせよ、どちらも大義名分のない《котора》ないし《крамола》に熱中し、あまつさえ「異教の勢をロシアの地へと引き入れ」(151) て、それぞれの父祖 (すなわち Oleg Svjatoslavič および Vseslav Polockij) のほまれをけがした以上は、双方とも負けたも同然である、と言いたいのです。

なお、不定形 понизить, вонзить は多くの研究者 (例えば最近では Lixačev, Obrębska-Jabłońska, Stelleckij, Nahtigal) が命令法 понизите, вонзите にあらためていますが、その必要はありますまい。不定形語尾 -ти の -ть への аросоре は 186にも быть という例があり (Р князю Игорю не быть кликну [scil. кладьнику?]), 不定形構文は例えば 83に例があります (J Уже намъ своихъ милыхъ ладъ ни мыслю смыслити …)。なお La Geste, 262 参照。

150. 「父祖のほまれを離れた」——высочисте изъ дѣднѣй славъ これは 144 J […] Изяславъ сынъ Васильковъ […] притрепа славу дѣду своему Всеславу と同巧異曲の表現です。Vasil'ko の子 Izjaslav は Gorodec の戦いでリトワニア人と戦って死んだ (144-145の注参照) ことによって、同じく Vasil'ko の子 Vseslav と Brjačislav とはリトワニア人を味方にして同族の Vseslaviči と戦った (151の注参照) ことによって、ともに дѣдъ (祖父、実は曾祖父) Vseslav Polockij の слава を傷つけたわけです。

151. おみたちは、いさかいに我を忘れて、異教の勢をロシアの地、フセスラーフの国へと引き入れたのだ。

152. そのあらいにつけ入って、世も末のいま、ポーロヴェツの地の果てから、トロイアの国を、よこしまがおそったのだ。

151. 「おみたちは、いさかいに我を忘れて…」——J Вы бо своими крамолами начясте (А начясте) наводити поганя на землю Рускую, на жизнь Всеславлю. 149の注にあげた1180年のJaroslav-Igor' 対 Vseslaviči との戦において、前者は polovcy を、また彼らに味方した Vasil'ko の子 Vseslav と Brjačislav とはリトワニア人を援軍としていました。(Ipatij 年代記1180年の項参照)。

[...] на землю Рускую, на жизнь Всеславлю は「ロシアの地、すなわち Vseslav の領国へ」ではなく、「ロシアの地 (の一部)、すなわち Vseslav の領国へ」の意味でありましょう。なお жизнь はここでは現代ロシア語の *достояние, богатство* に当たり、(Lixačev, *op. cit.*, 454), したがって жизнь Всеславлю は「(かつて) Vseslav の領有していた Polock 公国」を指します。

152. 「そのあらいにつけ入って…」——J Которю (РА Которое) бо бѣше насилие отъ земли Половецкыи (Р!) на седмомъ (Р На седьмомъ А наседмомъ) вѣцѣ з(емли) (РАなし) Трояни (Р Трояни А Зояни). (Р .なし) РА の Которое を Которю (<катора) と訂正することについては、Lixačev をはじめ筆者の寓目しえたすべての注釈書が一致していますが、отъ земли Половецкыи на седмомъ вѣце 以下については、Lixačev, Stelleckij, Nahtigal は РА の!を採用して Половецкыи! で文を切り、そのあとは Р を生かした На седьмомъ вѣцѣ Трояни で新しい文をはじめ、次の (La Geste では153の) връже Всеславъ жребій 以下につづけています。ただ Obrębska-Jabłońska (*op. cit.*, 141) だけは文の切り方は Jakobson と同様ですか、з(емли) は挿入していません。しかし Трояни の訳は na ziemię trojańską という、Jakobson の解釈を受け入れた訳になっています。Jakobson のテキストは、А の Зояни に注目し、М では з(земли の略字) Трояни となっていたに違いないと推定した結果にもとづいたものです。

私見によれば、この1節の解釈にあたっては、J 75-77 との細部にわたる類似をぜひ考慮に入れる必要があります。(152)「そのあらいにつけ入って」(J которю)——(77)「公たちは…やがてはわが身にかえるべきいさかいのたねをまく」(J начяша князи [...] сами на себе крамолу ковати); (152)「世も末のいま」(J на седмомъ вѣцѣ)——(75)「はや哀傷の時は来た」(J Уже [...] невелесая година вѣстала); (152)「トロイアの国を、《よこしま》がおそったのだ」(J бѣше насилие [...] з(емли) Трояни)——(76)「…《よこしま》があらわれたのだ、その《よこしま》は、乙女となってトロイアの国にしのみ入り、ドン近き青海原に、白鳥のつばさはためかせ」(J Вѣстала обида [...]: вступил (а) дѣвою на землю Трояню; всплескала лебедиными крылы на синѣмъ море, у Дону) このように対比してみると、両者の呼応関係は一目瞭然であります。とくに諸公の「内訌」(катора, крамола)によって、「トロイアの国」(*земля Трояня)が「よこしま」(насилие, обида)の見舞われおそうところとなった、という作者の根本思想がほぼ同じ措辞法によって表現されていることは、けっして偶然とは思われません(ちなみに *насилие* と *обида* とに同じ「よこしま」という訳語をあてたのは、La Geste の H. Gregoire 訳——双方とも *la violence*——にならったものです)。ところで *земля Трояня とは、Szeftel の説に従えば (La Geste, 101 f., 137 f.; なお14への筆者の注参照)、10世紀末から1060年ごろまでは torki の、それ以後は polovcy の夏期における滞在地であった Dnepr から Donec に至る Azov 海沿岸地方 (на синѣмъ море, у Дону) を意味しています。また76の「乙女となってトロイアの国にしのみ入」った *обида* は、75-78の注で紹介した Jakobson の研究によれば、窺極的には1185年、Igor' たちの敗戦によって起こった polovcy の侵入とそれによる南ロシアの荒廃を指すものにほかなりません。だとすれば152の *насилие* もそれと同じように解釈できるはずであり、従って Szeftel (La Geste, 137) が152は「1065年以後の Vseslav の数度の戦闘と、1068年の polovcy の大勝」のことを言っているのだ、と説いているのはあたっていないように思われます。

次に筆者がかりに「世も末のいま」と訳した *на седмомъ вѣцѣ* とは何か。長い間研究者たちをなやませてきたこの難問題は Jakobson の詳細な考証 (La Geste, 297 ff.) によって、見事に解明されたと言っても過言ではありません。すなわち彼によれば、ここに言う「第7の *вѣкъ*」とは第700年期ではなく、ビザンチンの天地創造暦による第7000年期を意味するもので、このような例はブルガリアや、古代ロシアの文献にしばしば見られることです。例えば: *о вѣцѣхъ мира отъ Адама до сего времени минуло естъ вѣковъ 6, а седмаго вѣка минуло 644: тысящъ бо лѣтъ вѣкъ естъ*

153. フセスラーフ、うまし乙女を得んものと、賽を投げた。

154. 計を用いて、槍を支えに、キエフ目指して身をおどらせ、古き都のこがねのみくらに柄をふれた。

единъ. (Хронологическая статья Кирика, 1136 [=6644]) この解釈を念頭においた上で、すでに 75-78 の注で述べた事実、すなわち Igor' たちの敗北とそれにつづく polovcy の侵入があった 1185 年は前記天地創造暦の 6693 年、つまり第 7000 年期の第 700 年期のおわりにあたること、この第 7000 年期はビザンチン・ブルガリアの終末観文学では世界の滅亡の時代と予言されていること、76 の дѣва-обида の形象は、上記終末観文学の代表作の一つたる Pseudo-Methodios の或るギリシアの version の、世界の終末にさいして出現する parthenos adikiā に当たると考えられること、ロシア年代記の 6000 と 600 とが重なった 6600 (=1092) 年代のはじめの記事には Pseudo-Melhodios からの引用ないしその réminiscence がとくに多いこと、などを想起するなら、152 は、75-78 と同じように、作者が 1185 年の諸事件を、世界の滅亡がはじまったのではないかという深刻な危機感を持って受けとめていたことを示す一節と取らねばならぬはずで、こう考えてきますと、この作品の中で 2 度も述べられている当時の終末観と強く結びついた作者の危機意識をまったく無視して、на седмомъ вѣщѣ 以下を Vseslav の事跡に結びつける Lixačev その他の解釈が、いかに不当なものであるかは多言を要しないと思われまふ。

153. フセスラーフ——Всеславъ この Vseslav は Polock の公 (1044-1101) Vseslav Brjačislavič で、Vladimir I Svjatoslavič が Polock の公 Rogvolod の娘 Rogneda (64 への注参照) を無理強いに妻にして生ませた Izjaslav の孫にあたります。彼の名は所有形容詞形もふくめてすでに 144, 149, 151 に出ており、これらの箇所はたぶん 153-163 のこの人物にかんするかなり長い digression への伏線であったらうと思われまふ。以下 Vseslav の事跡のうち、Slovo の内容に関係のあるものを Ipatij 年代記から摘記します。

1) 彼の母は魔法によって (от волѣхвованія) 彼を生んだ。魔法使いたち (волѣсви) たちのすすめにより、彼は生まれるとき頭にかぶっていた「膜」(=大網膜?) (язва, язвено) を一生涯鉢巻にしてしめていた。彼が流血をものともしない (немилостивъ есть на кровопролитъе) のはこのためである (1044 年の頃)。

2) 1067 年彼は戦争をはじめ (заратися), ノーヴゴロトを奪取した (1067 年の項、除村訳では p. 125)。なお、Szeffel (La Geste, 140) の引いている第 3 Novgorod 年代記、1067 年の記事によれば、このとき Vseslav は町に火をかけ、聖 Sofija 教会の全財産と、大燭台 (複数) と、鐘 (複数) とを奪っています。

3) Vseslav が Novgorod を攻略したことを知ると、Jaroslav [Mudryj] の 3 人の子、すなわち Izjaslav, Svjatoslav, Vsevolod は、戦士たちを集めて Vseslav 攻撃に向かった。彼らは Minsk を攻略した後、Nemiga へ追撃した。「Vseslav は彼らに向かって出動した。両軍は 3 月 3 日、大雪の日、Nemiga [川] のほとりで相会し、互いに攻撃しあつた。激戦で (бѣсть съча зла), 多くの者がたおれた。Izjaslav, Svjatoslav, Vsevolod が勝つた。Vseslav は逃げた。(1067 年の項、除村訳では 125)

4) 同じ年の 7 月、Izjaslav, Svjatoslav, Vsevolod は十字架に接吻して危害を加えぬと誓つたうえ、Vseslav をおびきよせた。Vseslav が Dnepr を渡つたのち、Izjaslav は誓いを破り Smolensk 近くの Orša 川のほとりで Vseslav を捕え、Kiev へ連れて行き、人びとは彼を二人の息子とともに牢獄に投じた (и всадиша и в порубѣ съ двѣма сынѣкома) (1067 年の項、除村訳では 125)

5) 1068 年、Izjaslav, Svjatoslav, Vsevolod の軍は、Al'ta 川のほとりで polovcy と戦つて破れ、polovcy が Kiev 地方を荒した。Kiev の住民たちは、[大公] Izjaslav に向かって polovcy と戦うために武器と馬を (оружья и кони) 与えることを要求したが、Izjaslav はこれを拒否した。Kiev の人びとは反乱を起こし、Vseslav を牢獄から (ис поруба) 連れ出して、彼を Kiev 大公の位につけた。Izjaslav はポーランドに亡命した。Vseslav は Kiev に 7 か月間君臨した。(1068 年の項、除村訳では 126 ff.)

6) 翌 1069 年、Izjaslav はポーランドの Bolesław [Śmiały] とともに Vseslav 攻撃に向かった。Vseslav はこれを迎え撃つために出動し、Belgorod まで未だが、夜半に Kiev の人びとにかくれて、Belgorod から Polock へ逃れた (бывшю ноци, утаися Кыанъ, бѣжа из Бѣлгорода къ Полотску) (1069 年の項、除村訳では 130)

153-154. ここで作者は、Vseslav の事績のうち中心的な位置を占める 1068 年の Kiev 大公位奪取の

155. かと見れば、血にかわくけものとなって、夜半のころ、人目しのんでベールゴロトをおどり出た、青霧に身をばつつんで。

てんまつを語っています (153 の注 5) 参照。「うまし乙女を得んものと」 (о дѣвицю себѣ любу) の「うまし乙女」がほかならぬその大公位を指すことは、諸家の指摘するとおりです。

「計を用いて、槍を支えに、キエフ目指して身をおどらせ」——J Тъи клюками подпръ ся (Р подпръся) о копии, (РА кони, и) скочи къ граду Киеву (РА,) Jakobson が РА の о кони, и を о копии に改めたのは、154 に дотчеся стружіемъ (槍の柄でふれた) とある上に、古代ロシア語に добыти копиемъ, възяти копиемъ (武力で奪取する) という軍事用語があることを考慮した結果です (La Geste, 92)。ところで大公位を手に入れるために、乗るかそるかの勝負に出 (「賽を投げ」 врже [...] жребій), 「計器を用い」 (клюками), 「武力に訴え」 (подпръся о копии), 「Kiev へ跳んだ」 (скочи къ граду Киеву) というのは、Vseslav のどのような行動を指しているのか。私見によれば解釈はふたとおりありうるようです。

1) Vseslav は Izjaslav によって Kiev 郊外の牢獄 (порубъ) につながれていたが、Kiev 市民の反乱が起こると、これに乗じて一挙に大公位を奪取しようとたくらみ、市民となんらかの取り引きをし (例えば Ipatij 年代記 1068 年の項所載の市民による Izjaslav 邸の略奪?), この武装蜂起をたくみに利用して、郊外の牢獄から大公の邸のある Kiev の「山の手」(вѣрхъ) へ急いだ。以上は年代記の記事の許す範囲での推定にもとづいた解釈で、例えば Lixačev (*op. cit.*, 455 f.) はこの解釈を採用しています。さらに彼はあくまで年代記の記事を尊重する立場から、РА の о кони を生かし、Vseslav は Izjaslav が馬を与えなかった (153 の注 5) 参照) ために反乱を起こした Kiev 市民に馬を与えることによって反乱を成功させた、これが клюками подпръ ся о кони の意味である、とまで主張しています。さすが、いかがなものでしょうか。少なくとも Vseslav が Kiev 市民に馬を与えた事実は、年代記には見当たりません。それにしても、市民たちによって解放された Vseslav が Kiev 郊外の牢獄から「山の手」へ「跳んだ」(скочи) という image は、「夜半」に Kiev を出て、「夜いまだあけぬに」トムータラカンに着く (159) ほど足の早かったこの人物にはあまりふさわしいとはいえないような気がします。

2) Vseslav は、かねがねねらっていた Kiev 大公位を手に入れるために、乗るかそるかの勝負に出た。そして、計略をめぐらし、「魔法によって」生まれた (153 1) 参照) 者にふさわしくあたかも槍を大地につき立てて空をとぶような早さで兵を動かし、Polock から一挙に Kiev をついた。以上は史実をあえて無視した、むしろ反対に魔術者としての Vseslav 伝説の motif の一つである草駄天走りを強調した解釈で、159 の image ともよく合います。もっともこの解釈では Vseslav のめぐらした「計略」が何であったかははっきりしませんが、そういえば 1) の解釈の、市民との「取り引き」にしたところで、じつは年代記には一語もしるされていないことで、従ってたんなる憶測にすぎません。のみならず、もしあくまで年代記の記事を重く見るとすれば、「計略」を用いたのは Izjaslav であって、Vseslav でなく (153 の注 4) 参照), この意味で Slovo の本文と矛盾するわけです。総体的に見て、hyperbole や métaphore を縦横に駆使した 153-163 は、あきらかに Vseslav 伝説の影響を色濃く受けており、後述のごとく、細部に至るまで史実と合致する 155 においてすら、Vseslav はまぎれもなく魔術者として描かれているくないですから、こうした contexte の中では、筆者は 2) の解釈をとることのほうがむしろ自然だと考えるものです。

「古き都のこがねのみくらに柄をふれた」——J дотчеся стружіемъ злата стола Киевскаго (Р Киевскаго) стружіемъ о копиемъ 同様武力行使を暗示していると思われませんが、ここで копиемъ の語を避け、また възяти でなく дотъкнути ся を用いて дотчеся стружіемъ と言ったのは、Vseslav が Kiev 大公だったのはたかだか 7 か月に過ぎないからでありましょう (153 の注 5) 参照)

155. 「血にかわくけものとなって、夜半のころ、人目しのんでベールゴロトをおどり出た」——J Скочи отаи (Р отъ нихъ А отнихъ) лютымъ звѣремъ въ пльночи (А полночи) (РА,) изъ Бѣлграда (Р Бѣла-града А бѣла-града): (РА,) この 1 句は、1069 年、捲土重來の Izjaslav を迎え撃つために Belgorod (Kiev の西約 24 キロの所にある町、現在の Belogorodka 村) まで来た Vseslav が、夜中にひそかにそこを脱出して Polock へ向かった事実 (153 の注 6) 参照) をふまえています。脱出に当たって彼がおおかみに身を変えたというのはもちろん年代記にはない描写で、おおかみへの変身という草駄天走りと並ぶ Vseslav 伝説のもう一つの motif を援用したものです。

лютый звѣрь は古代ロシア語における вѣлкъ の異名で、вѣлкъ がタブーであった関係でそのかわりとして euphémiquement に用いたもの。こうした例はほかにも見られます (例えば Čiževska, *op. cit.*, лютый の項参照)。

156. このフセスラーフ、幸運をつかむこと両三度。——ノーズゴロトの門うち破り、ヤロスラーフのほまれをくじき、

P の *отъ нихъ* を *отан* に改めたのは、上 (153 の注 6) 参照) に引いた Ipatij 年代記のテキスト *дугаися Кыанъ* にヒントを得たものでしょう (La Geste, 92)。もちろん多くの注釈者のように (例えば Lišačev, *op. cit.*, 457) P の *отъ нихъ* を生かして、*нихъ* をキエフ市民と解することも可能ですが、この代名詞に該当する名詞が前に見当たらないという難点があります。

以上、「人日しので」、「夜半」、「Belgorod 脱出」というの 3 つの *détail* は、年代記の記事とびたりと一致し、「おおかみへの変身」だけが Slovo の詩的独創です。なおこの *motif* は 157, 159 でも繰り返されます。

「青霧に身をばつつんで」——J *обѣси ся* (P *обѣсиа*) *снѣъ* (A *сине*) *мгль*. (PA ,) Lišačev (*op. cit.*, 457) はたんに *обнятый ночной тьмою* の意味だと述べていますが、再帰動詞アオリスト *обѣси ся* は魔術者 Vseslav が人の目をくらますためにおおかみに変身した上、みずから青い霧に「身を包んだ」意味に解すべきでしょう (Obrębska-Jabłońska, *op. cit.*, 143 参照)。

156. 「幸運をつかむこと両三度」——J *Утръже* (P *утръ же*) *вазни с три кусы* (P *возни стрикусы* A *вазнистри кусы*)——(PA ——なし) Slovo のいわゆる *темные места* のひとつ。ここではかりに Jakobson の読み方に従いました。この読み方は A の *утръже вазнистри кусы* を、1 字も改めずただ *вазнистри* を *вазни с три* と切って 3 字にしただけのもので、あたかも 28 の J *въ ста зби* (cf. P *въ стасби*) と同じ着想といえましょう。*утръже* は教会スラヴ語 *утрѣгнути* “arracher, saisir” のアオリスト形、*вазни* は女性名詞 *вазнь* “chance (fortuna, tukhě)” の単数生格形、*с* (+対格) は概数を示し、*кусъ* は “morceau, bout, bouchée” を意味すると彼は言います (La Geste, 241-243)。なお Jakobson の現代ロシア語訳は *трижды ему довелось урвать по кусу удачи* となっています。ただし Jakobson はその *трижды [...] по кусу* がどのような史実を指しているかは明言していません。

この読み方は Lišačev も支持していますが (Труды Отдела древнерусской литературы Института русской литературы АН СССР, XVIII (1962), 587 参照), Stelleckij はこのような текст はこの作品の *стиль* にも、*образы* にも、*ритмика* にも矛盾する、と批判しています (*op. cit.*, 189)。彼自身の読み方は *утрѣ же възни стрикусы* (= *a наутро вонзил секиры*)、Nahtigal のそれは *утрѣ же възънзи стрикусы* (= *zjutraj pa zasadil bojne sekire*)。両者とも *стрикусы* は **стрикус* の複数対格、**стрикус* は古代高地ドイツ語 *strit-ackus* (現代ドイツ語 *Streitaxt*) に由来すると見る Potebnja 以来の読み方に従っているわけです。なお **стрикус* はロシアの文献には見当たらない語です。

他方、Obrębska-Jabłońska (*op. cit.*, 143) はこの箇所は *treść niezrozumiała* だとして翻譯をあきらめたるうえで、Potebnja や Jakobson の説よりは、*вънзи (о)стры кусы* と読む L. A. Bulaxovskij の説 (Сборник статей, М.-Л., 1950, стр. 157-8 [筆者未見]) の方が *contexte* にもっとふさわしいのではないかと述べています。*кусы* はここでは Bulaxovskij によれば「野獣の歯」を意味します。

彼女も指摘するように、Bulaxovskij の読み方が、魔術者 Vseslav の *image* のにきわめてよく合致していることはたしかでしょう。なぜならこの読み方によれば、夜半におおかみとなって (*лютымъ звѣремъ*) 青霧につつまれて Belgorod から姿を消した Vseslav は、翌朝には (*утрѣ же*) はやくも「するどい牙をつきたてて」Novgorod の門をうち破り、その勢いを駆って、おおかみに変身し (*влькомъ*) Nemiga へ走ったことになるからです。Nemiga の戦いは Vseslav が Kiev 大公となるよりも前の事件ですから (153 の注 2) 参照)、このような描写が史実に合わないのは言うまでもありませんが、このこと自体はこの *contexte* では大して重要とも思えません。ただ Bulaxovskij の説の難点は、Obrębska-Jabłońska もみとめておおり、名詞 *кусъ* を「野獣の歯」の意味に使っている用例がロシアの文献にも方言にもひとつとして見当たらないことです。

「ノーズゴロトの門うち破り、ヤロスラーフのほまれをくじき」——J *отвори* (P *отвори*) *врата Новуграду* (P *Нову-граду* A *Нову граду*), (A .) *разшибе* (A *Раз шибѣ*) *славу Ярославу*. (P , A :) 作者は 154 で 1068 年の Vseslav の Kiev 大公位奪取、155 で翌 1069 年の Belgorod からの脱出をのべたあと、ここではそれらの諸事件に先立つ Novgorod 攻略 (153 の注 2) 参照) を語っています。ヤロスラーフは Jaroslav Vladimirovič (Mudryj) (f. 1054) を指します (5. *старому Ярославу*, 60. *давныи великыи Ярославъ* 参照)。Novgorod は 988 年 Vladimir から Jaroslav に与えられて以来 (Ipatij 年代記、同年の項、除村訳では 80) 「Jaroslav の町」として知られていました。1045 年には Jaroslav の息子 Vladimir がこの町の公として Kiev の Sofija 教会を模した、そ

157. おおかみとなってネミーガへ走り——麦打ちの平場を踏んだ。ネミーガの岸に敷いたは、穀束ならで人の首。穂を打つは、フランクのはがねのからさお。人の命を平場に積んで、箕にかけて、身と魂を吹き分ける。

158. ネミーガの血に染む岸に、まかるは、野の幸ならで、ロシアの子らの骨また骨。

159. 公として諸人を裁き、公としてあまたの町を治めたが、夜半ともなればおおかみとなって走った。キエフの都を抜け出でて、夜いまだあけぬに、はやトムータラカンに走り着く。大ホルスの行く手をすらさえぎりとめたこのおおかみ。

れと同名の教会の基礎をおいています (Ipatij 年代記, 同年の項, 除村訳では 113)。Vseslav の Novgorod 攻略は, 1 世紀以上もつづいた Jaroslav (およびその子ら) のこの「ほまれ」(слава) をおびやかすものだったわけです。

157. 「おおかみとなってネミーガへ走り」——J Скочи влъкомъ (А волкомъ) до Немиги, 以下 158 のおわりまでが Nemiga の戦闘 (153 の注 3) 参照) にかかわる部分です。ここでも Vseslav は 155 におけると同じく「跳躍するおおかみ」としてえがられています。Nemiga は Berezina の支流 Svisloč の支流。当時この川にのぞんで Nemiga という町があり, 戦闘はこの町の前面で行なわれたものようです (La Geste, 141 参照)。

「麦打ちの平場を踏んだ」——J съду токъ (Р съ Дудутокъ А съ дудутокъ) 従来は Р の texte どおり読んで, 「Dudutki から」と訳していました (例えば Lihačev, Nahtigal, Stelleckij)。Dudutki は Karamzin によれば Novgorod に近い町の名の由ですが典拠は不明です。これに対し Jakobson は дуду- を古代ロシア写本に散見する音節の redoublement の誤りと見て съду токъ (麦打ち場を踏んだ) と読み, 「麦打ち場」を戦場の métaphorique な表現と解するわけです (La Geste, 92)。すぐ下で人の首が穀束に, また戦闘が麦打ちちゃ吹き分け (веяние) やたねまきにたとえられており, またげんにこうした contexte で同じ токъ が 157 にもう一度用いられていること——J на тоць животь (Р животь) кладуть (Р кладуть) (人の命を麦打ち場に置く) ——を思えば, この съду токъ という読み方はきわめて妥当なものという気がします。それに Jakobson が同じ箇所で見ている Potebnja の説では, ロシアの民話で bogatyr' が一騎打ちをするとき, 《дми точок》といえは, それは《очищай место для поединка》の意味だと言います。なお戦闘を農耕にたとえることは, すでに 67 にその例が見えています; J чръна земля подъ копыты костыми была посьяна, а кровию поляна: тугою въздоша по Руской земли。

「ネミーガの岸に敷いたは, 穀束ならで人の首」——J на Немизъ снопы стелють (Р стелють) головами, Stelleckij (op. cit., 191) の引いている Potebnja の説によれば, 造格 головами は, 《дъсками съставивъ корабль》, 《церковь бяшетъ создана бѣлымъ каменемъ тесанымъ》の дъсками や каменемъ と同じく 《[вещество], из коего что-либо делается》をあらわします。これに従うとすれば, 上の 1 句の直訳は, 「穀束を首で作ってまく」となります。

159. 「キエフの都を抜け出でて…至り着く」——J ись (Р изъ) Кыева дорискаше до куръ (А ,) Тмутороканя, (РА;) до куръ は《до пения петухов》, つまり「にわたりの鳴くえに」「夜明けまえに」の意味。夜があけると魔法の力が失われるのでこのおおかみは夜のうちに Kiev と Tmutarakan' との間を一往復しなければならなかったわけです。ここでも Vseslav の卓駄天走りの motif が hyperbolique な手法で描かれています。ところで Vseslav と Tmutarakan' (29 の注参照) との関係について年代記に何ひとつ語られていないことは諸家の指摘するとおりです。そこで Tmutarakan' の名は Stelleckij (op. cit., 192) が L. A. Dmitriev の見解を引いて言うように, 「非常に遠い所」としてあげられているに過ぎない, とも考えられます。ただ Szeftel (La Geste, 141) は, 年代記 1068 年の項に, 1061 年 Izjaslav に憎まれて Kiev を去った Tmutarakan' の修道院長 Nikon が Kiev に帰ったとあること, この Nikon は A. A. Šaxmatov によれば年代記に採られた 1068 年の事件 (153 の注 5) 参照) の記事の筆者であること, この記事は Vseslav に同情的であることなどを手がかりにして, Vseslav が Tmutarakan' へ夜中に走ったという Slovo の 1 句は, 反乱の直前に彼が自分に好意をよせる Tmutarakan' のコーカサス人とひそかに気脈を通じたことを暗示しているかもしれない, と述べています。

「大ホルスの行く手をすらさえぎりとめたこのおおかみ」——J великому Хръсови (Р хръсови А хръ сови) влъкомъ (Р влъкомъ А волкомъ) путь прерискаше. ホルス (Хорс) は古代ロシアの異教の神。太陽神と考えられています。

160. 朝まだきポーロツクなるソフィヤの鐘が、朝の祈りを告げたとき、この公はキエフにあってそのねをきいた。

161. 心は魔術師、身は二つのこの公も、あまたたび悲運に泣いた。

162. さればこそ、神にも似たる神人ボヤーン、この公を予言して、かくは歌った。

163. 《妖術をあやつる者も、狡知にたけたる者も、声高らかに鳴く鳥も、神の裁きをのがるるすべなし》。

164. おお、ロシアの国よ、いにしえの世、いにしえの公たちをしのんで、汝のなげくときは来た。

165. そのかみの、かのヴラジーミルを、なんびともキエフの丘にとどめることはなし

160. 「朝まだきポーロツクなる…そのねをきいた」——J Тому въ Полотъскѣ (Р Полотскѣ А Полотъ скѣ) позвониша заутреню рано у Святыя Софея въ колоколы (РА :) а онъ въ Киевѣ звонъ слыша. 《Святая София》はどうやら Vseslav 自身が建立したと思われる (La Geste, 142, Lixačev, *op. cit.*, 459 参照) Polock の教会の名。全文の趣意は、通説では、Vseslav は Polock の聖 Sofija 教会の彼のための (тому!) 朝の祈禱の鐘が鳴っている間に Polock を出て、まだ鳴りおわらぬうちに Kiev へ着いた、というふうに解釈されています。この解釈によれば 159 におけると同様、Vseslav の韋駄天走りのめざましさが強調されているわけです。Szeftel (La Geste, 142) はさらにこれに加えて、これは Vseslav が Polock および Kiev の二つの公国を同時に支配したことの symbole でもあると説いています。他方、Lixačev (*op. cit.*, 459) はこうした解釈に異をとらえ、この箇所は、言うまでもなく (конечно), Polock の Sofija 教会が、自分たちの公であり、教会の建立者でもある彼のために祈禱をささげたとき、Vseslav は Kiev の牢獄で呻吟していた、という意味に取るべきだ、つまりこれは次の 161 の Vseslav が「あまたたび非運に泣いた」という 1 句につながるものだ、と主張し、Obrębska-Jabłońska (*op. cit.*, 144) もこれに同調しています。いずれの解釈にもそれぞれ理があると思われませんが、159 の動詞のテンスがいずれも imperfect (судяше, радяше, рыскаше, дорискаше, прерыскаше) であるのに対して、160 では aorist (позвониша, слыша) になっていることを考慮して、Lixačev の説に従っておきます。

161. 「身は二つ」——J в' (Р въ) друзѣ тѣлѣ РА の друзѣ は多くの研究者によって дрѣзѣ と改められていますか (例えば Livačev, Obrębska-Jabłońska, Stelleckij), Jakobson は La Geste の本文ではいったん дрѣзѣ としながら、補遺では古代アイスランド語で「おおかみ人間」の形容に用いられる eigi einhamr (=qui a plus d'une enveloppe) をよりどころにして、РА の друзѣ を生かしています (La Geste, 381)。なお другъ はここでは двойкий の意味です (Čiževska, *op. cit.*, 134 参照)

162. 「さればこそ神にも似たる神人ボヤーン…かくは歌った」——J Тому въщей Боянь и пръвое (А первое) припѣвку смысленый рече: Воjan が予言したという意味の表現は 145, 209 にも出て来ます。もっともこのふたつの箇所は пръвое [...] рече でなく、それぞれ 145. J И рекъ Боянь (РА Боянь なし); 209. Рекъ Боянь となっていて、副詞 пръвое (=пръвое「あらかじめ」) がありませんが、contexte から言って、「予言」であることは明瞭です。

163. 「妖術をあやつる者も…神の裁きをのがるるすべなし」——J Ни хитру, ни горазду, ни птицю (А ниптицю) горласту (РА горазду) суда божія не минути (А неминути). この「予言」のはじめとおわりの部分は、《Molenie Daniila Zatočnika》の XIII 世紀の version に《суда де божія ни хитруму, ни горазду не минути》とあるところから、じつは当時行なわれていたことわざであることが知られます (La Geste, 43; Sfelleckij, *op. cit.*, 193)。これをそのまま引用せず、「鳥」を持ち出したところに作者の詩的な技巧がうかがわれると思いますが、Р の птицю につづく形容詞 горазду は Jakobson の言うようにおそらく scribe の不注意にもとづく誤りでしょう。彼はこの形容詞が「九分どおり間違いなく」(selon toute probabilité) かんらい горласту (Даль, I, 936: горластый 《声の大きい》参照) と書かれていたはずだと推測しています (La Geste, 93)。

164. 作者はここで、みずからの「みだれはらむ世 (《жирня времена усобица》-76) と、Vladimir I Svjatoslavič († 1015) 在世中の「古きよき時代」ともを対比しています。

165. 全文の趣旨は、Vladimir は Kiev 周辺の地域だけでなく、ロシア全土の統一と安全とを念願

えなかった。

166. しかるにいまや、かの公の旗、かなたリューリク、こなたダヴィトと、護持してあれど、旗さきは敵と味方にわかれてなびく。

し、たびたび遠征を行なって外敵の侵入を防いだ、というにあります。作者はいわば empire builder としての Vladimir の活動を理想と見、この理想のかがみにてらして現在のロシア諸公のふるまいを暗に批判しているわけです。なお「そのかみのヴラジミール」(старый Владимир) という表現は 6 にも出ています。

166. 「しかるにいまや…護持してあれど」——J Сего бо нынѣ стаха стязи Рюриковы, (А, なし) а друзи (А адрузи) Давыдовы, (Р ; А.) 「いまや」(нынѣ) の 1 語は Vladimir の時代との対比をあざやかに浮き立たせています。Rjurik と Davyd については 127 の注を参照。

「旗さきは敵と味にわかれてなびく」——J нь роз'но ся (РА рози нося) имъ хоботы пашуть (Р пашуть). (РА,) хоботоъ は竿についた部分が幅がひろく、先に行くに従って細くなる XII 世紀のロシアの軍旗の先端を指します (Stelleckij, *op. cit.*, 194)。роз'но ся имъ хоботы пашуть は諸公の間の関係について「彼らは協力していない」という意味をあらわします。類似の表現として次の 1 句を参照: твой щитъ и мой не розно еста (=я с тобою продолжаю находиться в оборонительном союзе) (Ipatij 年代記 1150 年の項) (Lixačev, *op. cit.*, 460 参照)。すでに 121-122, 127 の注で述べたように, Igor' 敗戦のあと, Končak 汗のひきいる polovcy の一隊が Perejaslavl' 公国へ侵入したさい, Rjurik Rostislavič は Perejaslavl' の公 Vladimir Glebovič の要請に応じて, Kiev 大公 Svjatoslav とともに Perejaslavl' の防衛に加わりましたが, Rjurik の兄弟 Davyd は要請にこたえず, また Končak 軍が Rim (Rimov?) を包囲したとき, Svjatoslav と Rjurik が救援におもむかなかつたのも, Davyd が来援に応じなかつたためでした。Rjurik と Davyd との旗の先がわかれわかれに (роз'но) なびく, というのはこの事実を指しています。